

# 天文教育

2023

7

*Publications of the Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy  
(PJSEPA)*



〈特集〉中部支部会

〈連載〉Mitaka カスタマイズの手引き (2)

〈投稿〉アステリズムの変遷と多様性 (2)

〈報告〉CAP2022@シドニー、参加報告／こどものためのジオ・カーニバル報告

〈会員の声〉一般の人への天文情報の伝達

〈その他〉年会のお知らせ (第4報) ／若手奨励賞の募集 ほか

一般社団法人 日本天文教育普及研究会

## 本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

なお原稿の投稿は、編集部から依頼した場合を除き、原則として当会会員の方に限らせていただきます（共同執筆者に会員を含む場合はこの限りではありませんが、投稿は会員の方からお願いいたします）。

1. **原著論文**：天文学教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主要内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクト（要旨）には英文も付けてください（英文は審査通過後に追加も可）。
2. **解説記事**：天文学や天文学教育・普及に関する解説・紹介記事や、さまざまな天文学教育や社会教育などの実践記事。分量は刷り上がりで6～10ページ程度。
3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告など。分量は刷り上がりで2～4ページ程度。
4. **書評**：天文学や天文学教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで1～2ページ程度。
5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで1ページ程度。
6. **表紙の写真**：タイトルと400字以内の「表紙の言葉」とともにご投稿ください（写真のみでも構いません）。
7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただきます場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。

- ・ **締め切り**：1は随時受け付け、2～7は偶数月（発行の前月）15日です。投稿先は [post@tenkyo.net](mailto:post@tenkyo.net) です。
- ・ 本誌に掲載された記事（上記1～6および7の一部）は、当会 Web サイトにて pdf ファイルの形で一般に公開いたします。インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡ください。
- ・ **広告掲載**を希望される方は事務局 ([jimu@tenkyo.net](mailto:jimu@tenkyo.net)) までお申込みください。掲載料は B5 判 1 ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4 ページ ¥7,000-、チラシの折り込み ¥20,000-です。

### 【編集委員会からのお願い】

『天文学教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願いいたします。

- ・ 原稿の投稿は、原則として Microsoft Word ファイルでお願いします。
- ・ 執筆用のテンプレートが当会 Web サイト (<https://tenkyo.net/>) からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださるようお願いいたします。執筆上の留意点なども記しています。
- ・ 十分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
- ・ 提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
- ・ Word 以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
- ・ 原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願いいたします。

投稿先・質問先 メールアドレス：[post@tenkyo.net](mailto:post@tenkyo.net)

## 表紙の言葉

### 「双子の星」を巡る話

2023年6月17日 01h00m, Canon EOS R5, AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED (24 mm, F=2.8), ISO8000, 20秒露出  
撮影地：長野県木島平村, 撮影者：大西浩次

宮沢賢治の童話の中には、星を題材にしたものがたくさんあります。その中でも「双子の星」は、そのモデルとなった星に関して諸説あり面白い。久しぶりに童話を読んでみて、情景の描写など実に良く天の川を観察していると感じている。ちょっと紹介してみよう。主人公は、チュンセ童子とボウセ童子という双子のお星さまで、昼の間に行った冒険のお話だ。その二人のお役目は、夜の時間、それぞれ、お宮の中で星めぐりの歌に合せて銀笛を吹くことです。そのお宮の位置は「天の川の西の岸にすぎなの胞子ほどの小さい二つの星」とあります。さて、さそり座の尾のλ星とυ星は、天の川の中心方向の西隣に位置し、2つの星が並んでいる姿は、確かに「すぎなの胞子」のようにも見えるのです。さらに、最初の

冒険の舞台ともなる「西の野原の泉」の場所は「青い小さな星で円くかこまれて」います。ところで、私が撮影時のピントを合わせに使う天体が、まさにこのλ星とυ星の延長線上にある散開星団 M7 なのです。ですから、この記述を読んだ瞬間、M7 だと思いました。ただ記述の中ではもう少し離れていて、泉から天の川に水が流れ落ちるといった記述もあるので、M7 の上の「バーデの窓」の可能性も考えられます。ここは、銀河系バルジがちらりと見えている所で、重力マイクロレンズ法による系外惑星探査の領域です。さらに、2つ目の冒険では彗星が二人の近くを通過し事件が起きます。ここで、「双子の星」を書いた1918年以前にさそり座の尾の付近を通過した彗星を探してみました。そこで見つけたのが1910年1月の大彗星です。この彗星は尾が地球に衝突すると話題になったハレー彗星（1910年5月）の直前に現れた日中でもみえた大彗星です。事実、宮沢賢治もこの彗星の歌を残しています。これらの考察を合わせると、「双子の星」はさそり座のλ星とυ星のペアだと考えるのです。